

茨城歴史散策

209
流鏑馬サミット
参加団体の紹介⑦

流鏑馬の目枝神社

(茨城県土浦市)

流鏑馬には子どもが登場することがよくあります。毛呂山町では子どもが射手となり、矢を射る役目をしますが、子どもが射手以外の役割をする祭りもあります。茨城県土浦市の日枝神社の流鏑馬では、子どもは美しく着飾り、人身御供という役割を務め、さらに、流鏑馬祭り全体に物語性がある珍しい流鏑馬です。今回は土浦市の流鏑馬を紹介します。

豊かな自然の遊覧都市・土浦市

茨城県南部に位置する土浦市は、西に湖面積日本第2位の霞ヶ浦の西端を持ち、日本一のレンコンの産地となっています。東には広大な穀倉地帯と筑波山系に連なる山々を有しています。霞ヶ浦に程近い、現在の土浦市駅前には室町時代に土浦城が築城されました。幅広い二重の堀で守られているため、たびたびの水害でも水没することなく、亀の甲羅のように浮かんで見えたため「亀城」

の異名がついています。現在では亀城公園と市立博物館として整備され、春の桜や8月のスイレンなど市民の憩いの場となっています。人口約14万4千人、面積は約123平方キロメートル、土浦市は、今年市制施行70周年を迎え、豊富な水を巧みに活用した「遊覧都市」として発展しています。

流鏑馬にまつわる物語

土浦市の日枝神社は、滋賀県大津市坂本の日枝神社から大同2年(807)に分祀されたと伝えられます。これは神仏習合の時代、日枝神社に近い東城寺が比叡山延暦寺を模して創建されたため、延暦寺の



大猿退治の伝説を儀式化した流鏑馬

鎮守である日枝神社の日吉大権現を分霊したと伝えられています。

日枝神社の流鏑馬は旧山ノ荘の7地区で行なっています。当社の流鏑馬は大猿退治の伝説を儀式化したもので、室町時代、当社に悪事をはたらく大猿が山王権現のコウカの木(ネムノキ)に棲みつき、村から人身御供を差し出させていたといわれています。その大猿を領主である小神野從羅天が見つけ、弓の名手である市川将監と図り、退治したというものです。

この伝説になぞらえ東城寺地区からは人身御供の稚児が出され、領主の小神野從羅天役と市川将監役はそれぞれの末裔の当主が務めます。流鏑馬は大猿が棲んでいたとされるコウカの木で作られた馬場に3ヶ所立て、まず小神野從羅天が150メートルの馬場を走り抜け、その後、人身御供の稚児が馬場を4往復します。続いて鎧姿の市川将監が出陣し、7回流鏑馬を行い、大猿に見立てた的を射て祭りは終了します。このように流鏑馬の内容を物語化した祭りは珍しく、地域の人びとも大変親しみやすいのではないのでしょうか。

吉物の稚児

日枝神社の流鏑馬で注目したいのは人身御供の稚児が「吉物」と呼ばれていることです。「吉物」とは古



美しく着飾った稚児

くは神の依代としての意味をもっていました。幼い男児に化粧を施して美しく着飾り、頭上に山鳥の羽を冠した笠を被ることが特徴で、平安時代の祭りに好んで出されました。この日枝神社の「吉物」も美しい緋色の打掛のような衣装をまとい、山鳥の羽を着けた笠を被り、東城寺の地区からのみ小学生の男児が選ばれています。「吉物」は流鏑馬が古い祭りの名残をとどめていることを表しているのかもしれませんが。



茨城県土浦市